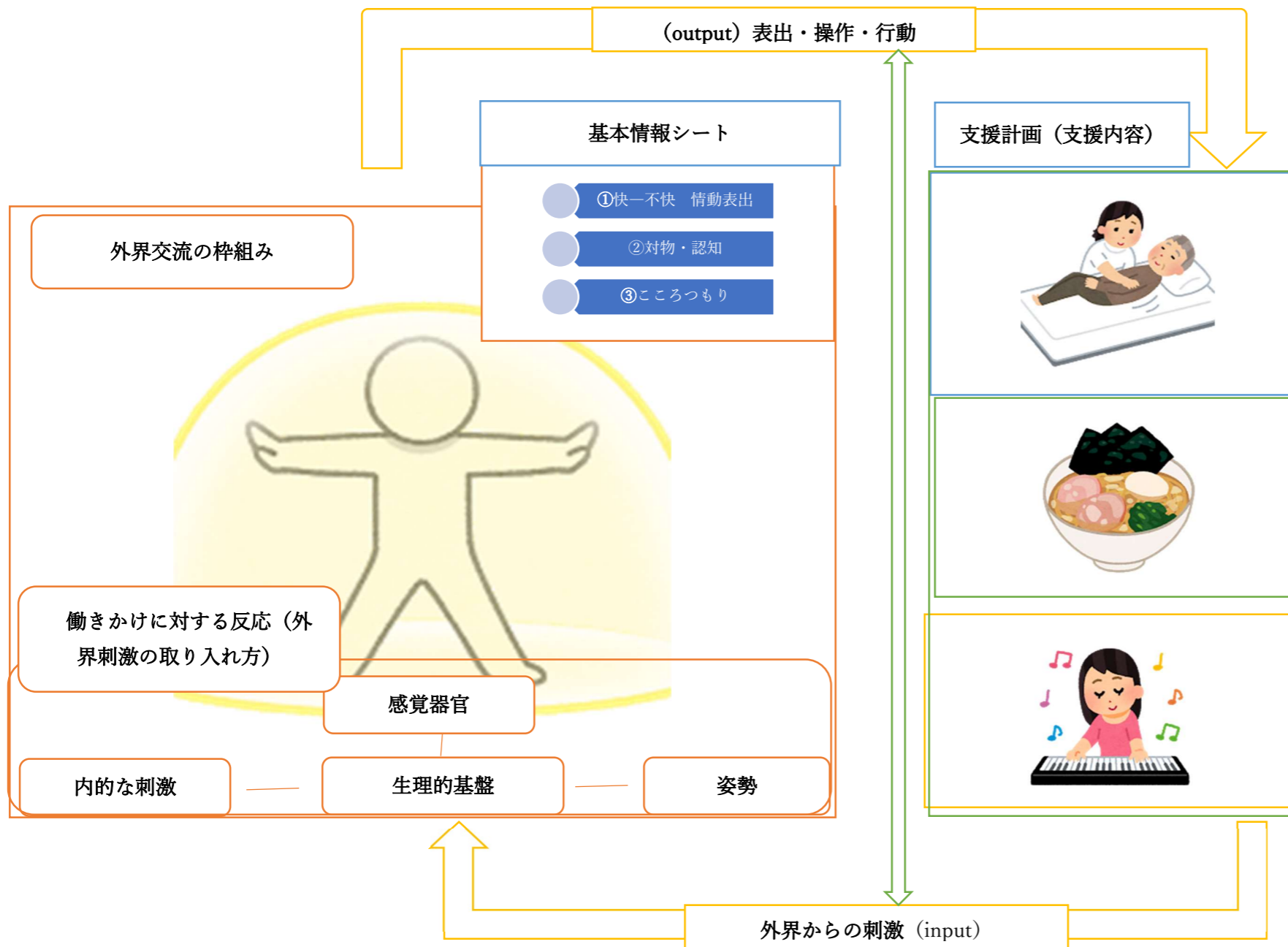


① 快—不快 情動表出 ②物の認知・操作（知的） ③外界からの刺激の受け止め方：重心 ④こころつもりを持つ力
 そのうえで、外のものに働きかける力が発揮されるため、その力や支援内容は支援計画に記載し具体的な取り組みとなる。



※基本情報シートからアセスメントされた明らかにすべきこと（目標）に対して、日々の支援内容から働き掛ける時のポイントとなる。

- 提示方法を一定に：繰り返される日課の中で次に起こることの提示方法を一定にし、本人の場の理解を確かめるように働きかける。
- 構えを作っていたかく：行為を行う前には声をかけ、身体に触れるなどの働きかけで本人が構えを作りやすいように配慮する。
- 手順の統一：姿勢変換や移乗、ケアの際の声かけや手順、やり方を職員間でできるだけ統一することで、本人がどのように動くか予測しやすく、構えが持ちやすいと同時に、自発的な動きを引き出す。
- 同じことを継続する：場所や流れ、物や席の配置、導入（開始前の始まりの曲、合図、あいさつなど）や働きかけや声かけの仕方を一定に継続することで、心つもりや期待感を持ちやすいようにする。そのうえで、本人の表出をとらえ、期待感をとらえながら働きかけていく。

以上の事を実践するためには、個々の支援時のポイントだけでなく、事業所内での日課における、食事の順番・作業の順番など暮らしの要素についても調整が必要となる。

（目標）記載時の留意点 ゴールを想定して設定すること。

- ①快不快は「現在わかっている表出について、仮説たてて明らかにする」でよいが仮説を記載する。
- ②操作性に乏しい場合は、視覚・聴覚の力を確かめる働きかけが必要となる。
- ③こころつもりは「こころつもりを持っている姿」を明らかにする必要がある。